



## TUAD IS HERE

●日常の中の芸工大  
 福島の子どもたちに創造体験「キッズアートキャンプ山形」を開催。(東北復興支援機構TRSO)

福島第一原発事故で被災された南相馬市の親子22組、合計105名を夏休み期間中に芸工大へ3泊4日で招待する「キッズアートキャンプ山形」を行いました。プログラムは、ステンシルを使ったTシャツづくり

や草木染め、陶芸、果樹園や水田での農業体験などで構成し、美術大学らしい創造体験と山形らしい自然に触れる機会を設けたもの。最終日には、南相馬を象徴する「相馬野馬追」をモチーフにした大きな

旗を2枚制作。前日に書いた「未来の君へのメッセージ」が馬の身体に写し取られ、参加者全員の未来への願いが込められた応援旗が完成しました。  
 WEB イベント参加者の声を紹介しています。

### 表紙のアート



未来に持っていくもの、置いていくもの。  
 「東北画は可能か？」プロジェクト「方舟」が完成。

日本画、洋画、総合美術など様々なコースの学生が参加しているチャートリアル「東北画は可能か?」。「未来に持っていくもの」と置いていくものをテーマにした共同制作作品「方舟」には、朝と夜に抱かれた山々や田園、コンビニや高層ビル、原発などが描かれ、観る者に「あなたはどちら?」と問いかけます。学生たちの個性と現実感がぶつかり合い結実した作品です。

WEB 「東北画」について詳しく紹介しています。

### g\*gとは

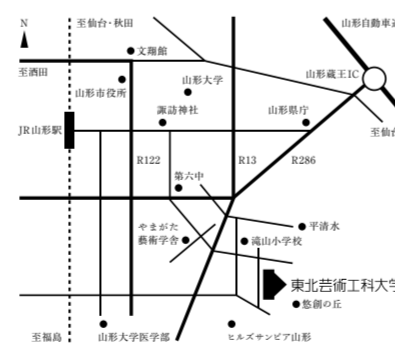
芸工大広報誌のタイトルは「g\*g」。最初の「g」は芸工大のgであり、もう一つの「g」は芸術市民のg。文化的志向を持つ皆さんを「芸術市民」と名付けました。あの絵が好き! このデザインがカッコいい! 景観がきれい! こんな風に日常の中で感動できる人は立派な芸術市民。そんな芸術市民のみならず芸工大が、「+」より強い「\*」で結ばれることで、新しい何かを創り上げていきたい、そんな思いを込めて「g\*g」、親しみを込めて「ジー・ジー」と呼んでください。  
 広報室では、「g\*g」を置いていただけるショップやギャラリーなどを随時募集中です。

### 東北芸術工科大学

【芸術学部】文芸学科、美術史・文化財保存修復学科、歴史遺産学科、美術科〔総合美術/日本画/洋画/版画/彫刻/工芸(漆芸、陶芸、金工)/テキスタイル〕  
 【デザイン工学部】企画構想学科、プロダクトデザイン学科、建築・環境デザイン学科、グラフィックデザイン学科、映像学科、メディア・コンテンツデザイン学科  
 【大学院芸術工学研究科】博士後期課程 芸術工学専攻、修士課程 [芸術文化専攻/デザイン工学専攻/デザイン工学専攻(仙台スクール)]  
 【研究機関】やまがた芸術学舎/共創デザイン室/東北復興支援機構TRSO、東北文化研究センター、文化財保存修復研究センター、こども芸術教育研究センター、デザイン哲学研究所、東アジア芸術文化研究所

g\*g オフィシャルサイト <http://gs.tuad.ac.jp/gg/>

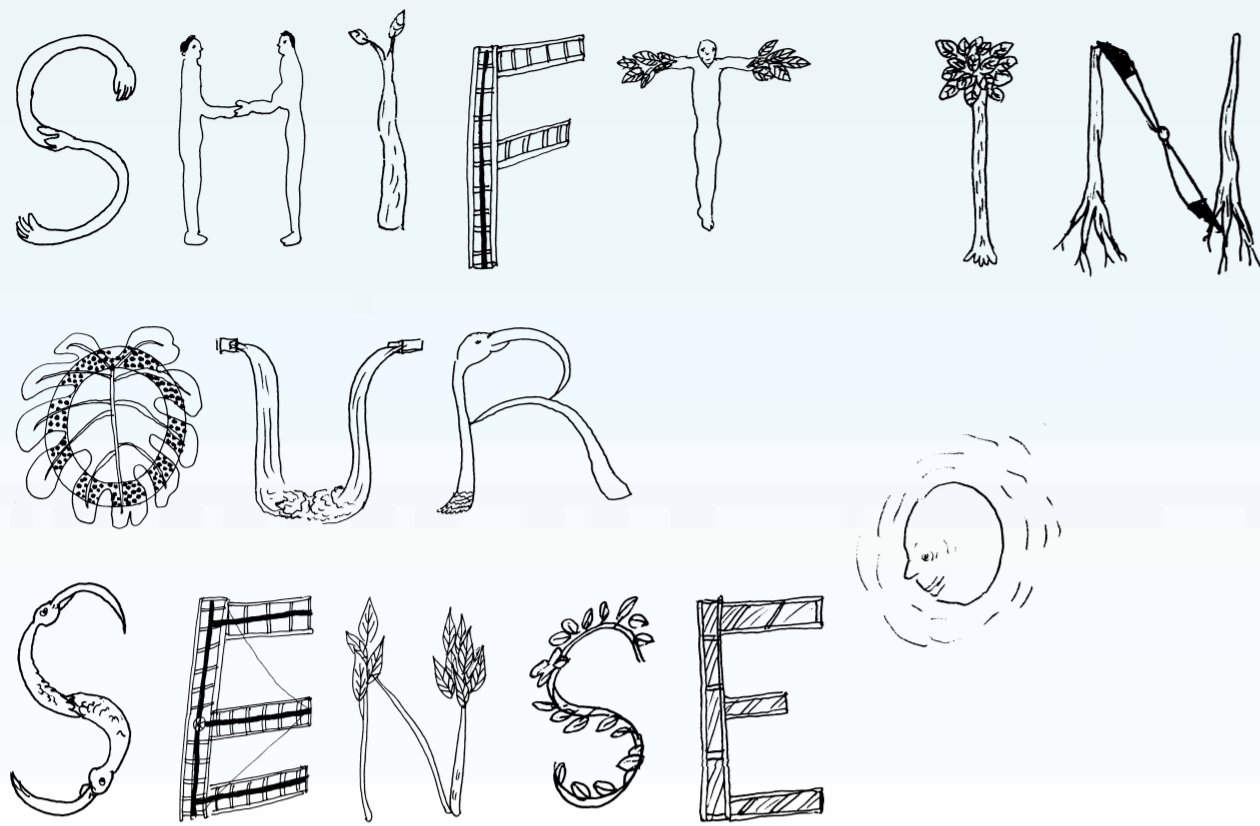
### 大学周辺マップ



東北芸術工科大学広報誌 g\*g  
 2011年10月14日発行  
 発行:学校法人東北芸術工科大学  
 〒990-9530 山形県山形市上楳田3-4-5  
 東北芸術工科大学広報室  
 TEL:023-627-2246 FAX:023-627-2185  
 URL: <http://www.tuad.ac.jp/>  
 E-mail: [hello-gg@aga.tuad.ac.jp](mailto:hello-gg@aga.tuad.ac.jp)

©東北芸術工科大学 Printed in Japan 2011





3.11以降、大きく変化した人々や暮らし、地域社会の価値観。新しい意識をもとに、芸工大も確かに動き出しています。



東北のこれからの故郷のイメージ図。山頂や沖合に2MWの風力発電を4,660本。住宅は4KW/戸、集合住宅は1KW/戸の太陽電池を設置するなど、東北で使用する電気は供給可能。森林の成長量の50%をバイオマスエネルギーとして暖房や給湯に利用します。地場産業とも親和性があり、復興を支える経済的基盤にもなりません。作画は、本学卒業生の後藤拓朗さん。

いま見えてきた、これからの日本の姿とエネルギーシフト。身近なところから、暮らしと社会の変わり方を考えます。

●マエキタミヤコ客員教授 × 竹内昌義教授 対談

**マエキタ**：東日本大震災と原発事故で日本の安全神話は崩れ、今まで見えてないものが見えるようになってきました。社会学者の宮台真司さんは「今までは“依存”して上手くいかない”文句”を言う時代、これからは“引き受けて自分でやる”時代」と言っています。これは、原発にも政治にも言えることですね。そして、エネルギーを自然で安全なものに変えていこうと考えると、政治の体制を変えていく必要性が出てくるんです。

**竹内**：任せておけばなんとかなるだろうと思っていたことが、どうにもなりませんでしたね。僕は、サステナブル10の提言の後にエコハウスを作ってみて、単純にエコハウスが増えれば自然エネルギーでいける、ということが分かってきました。まだ3年くらいの活動で山形エコハウスの経験しかないですが。

**マエキタ**：私も似たようなものですよ。政治や原発について勉強し始めたのは3.11以降。本質的にしよわせの構造で人権的にも問題がある仕組みだとされている原発を止められたらいいよね、という発想でエネシフジャパン（エネルギーシフト勉強会）を始めました。

**竹内**：その成果のひとつとして、再生可能エネルギー促進法案が通り、浜岡原発が止まりましたね。

**マエキタ**：これは、私たちの力で政治をクリエイティブにすることができるといいう手がかりができた点大きい成果でした。審議の傍聴や国会議員との勉強会を重ねると、議員が審議に対して真剣に取り組むようになってくるんです。こちらが働きかけて国会議員も官僚もみんな力が合わせれば、政治は応えてくれるし、手の届く身近な存在だということがわかりました。

**竹内**：10月から山形で開催する「エネルギーシフト勉強会 in 山形」は、これまで白紙委任していた状態から、みんなで考えていく時代に変えよう、声を出そうという動きです。山形の皆さんには是非参加してもらいたいですね。

**竹内**：被災した東北でただ復興するのではなく新しい何かを興すことが、夢や希望に繋がります。原発に頼らず自然サイクルで

賄える持続可能なエネルギーが、震災を受けて一層注目を浴びていますが、たとえば漁業をやっている人が風車を、農業をやっている人が太陽光発電を担い副業としてやっていけるようにすれば上手くいくのではと考えています。バイオマスエネルギーが普及しているオーストリアで、道路の下に敷設する配管について「日本ではとても高いですね」という話をしていると、その辺のおじちゃんが「それ俺が掘ったんだ」と言っていたことがありました。エネルギーは身近で重要で、そして自分たちでなんとかできる問題なんです。

**マエキタ**：私は、竹内先生にエコハウスを見せてもらった時の経験がすごく大きくて。熱交換機を見た時に「えーこれだけ!? ロータックじゃないですか!」ってびっくりしたんです。こんな簡単なシ

テムがなぜ普及しないのかを聞いたら「ローテックだから」って答えられて(笑)。

**竹内**：極端な言い方をすると、エコハウスって断熱材が多いだけですからね。でも、それだけでそれだけのことができる。

**マエキタ**：「あー、ローテックがエコなんだ」と学びました。日本はハイテクに強いけどローテックなものを取り入れようとするモチベーションは弱いですね。ローテックの追求がされていないんです。

**竹内**：家の契約電気容量も20Aで済むところを50Aに設定したり、お任せでも快適になるように、過剰な設定にしていた傾向はありますね。

**マエキタ**：これからはローテック方面に工夫を凝らしたハイテクが必要じゃないですか。ハイテクにして依存するのではなく、ローテック的なものの使い心地の良さに技術を花開かせていくということが。しあわせって、きっとローテックなんです。好きとか、愛してるとか、誰にも依存しないで判断してるじゃないですか。それをそのままエネルギーや政治、国会、地方議会に繋げていけば、もっと私たちはしあわせになると思います。美味しいとか、気持ちいいとか。

**竹内**：安全な暮らしとか。  
**マエキタ**：楽しいとか、クリエイティブも。



しあわせって、きっとローテックなんです。マエキタミヤコ [クリエイティブディレクター]

エネルギーは自分たちでなんとかなることができる問題なんです。竹内昌義 [建築・環境デザイン学科教授]

**建築・環境デザイン学科**

衣・食・住という言葉の通り、毎日の暮らしに欠かせない住まい。建築・環境デザイン学科では、一人ひとりが持っている“こんな家に住みたい”や“こんな暮らしをしたい”を実現するために必要な知識と技術、そして美意識を育みます。部屋の模様替えといった身近な部分から建築、さらには地球環境まで、未来を見据え幅広く横断的に学んでいきます。エコハウスの建設やサステナブル10の提言、山形R不動産、蔵プロジェクトなど実践的な取り組みも幅広く展開しています。

**木造の仮設商店街を被災地に**

間伐材などを利用した、組み立て式の木造仮設空間「エココフレーム」。これまでも被災地各地に設置してきましたが、客員教授の森みわさんの提案で、宮城県女川町にも展開する予定です。女川の被災者が地元で買い物などができ、地域経済の復興のきっかけになるように、30セットのエココフレームを用いて、飲食と日常雑貨や生鮮食品が購入できる店舗を集めた小さな商店街を設置します。年内の完成を目指しています。

**マエキタミヤコ** Miyako Maekita  
コピーライター、クリエイティブディレクター、建築・環境デザイン学科客員教授。1963年生まれ。東京都出身。大学卒業後、電通に入社。94年よりNGOの広告に取り組み、2002年広告メディアクリエイティブ〈サステナ〉を設立。これまで準広告電通賞や日経「話題になった広告」、グッドデザイン賞など数々の賞を受賞。「100万人のキャンディライト」よびかけ人。最近では、「フードマイレージ」キャンペーンや、「いきものみつけ」プロジェクトを手掛けている。雑誌「エココロ」編集主幹など。主著に「エコシフト」、「でんきを消して、スローな夜を」などがある。  
サステナURL: <http://www.sustena.org/>

**竹内昌義** Masayoshi Takeuchi  
建築家、建築・環境デザイン学科教授。1962年生まれ。神奈川県出身。東京工業大学大学院修士課程修了。NHK長野放送会館建設のコンペをきっかけに発足した建築設計事務所〈みかんぐみ〉のメンバーとして、2005年の「愛・地球博」ヨタグループ館をはじめ、住宅から仮設建築物、小学校にいたるまで、さまざまな物件の建築設計を手がける。「Rプロジェクト」や「CET (Central East Tokyo)」などに参画、まちの活性化に取り組むほか、子どものためのワークショップなど、幅広い活動を展開している。2009年「未来の住宅カーボンニュートラルの教科書」を共著。  
みかんぐみURL: <http://www.mikan.co.jp/>

エネルギーシフト勉強会 in 山形  
東北における自然エネルギー転換プラン-新しいふるさとづくり

エネルギーのことに2011年3月11日までは無関心だった人は多いはず。しかし、私たちの電気の一部を支えていた原子力発電所の事故は、日本人がかつて経験したことのない災害にまで発展しています。そこで多くの方と共に、どうしたら安全で快適な暮らしや社会がつくれるかを、ゲストとの対談を通じて考えていきます。

第1回目は、再生エネルギー法制定に向けて多くの人を巻き込み勉強会を仕掛けてきた、マエキタミヤコ氏をお招きして、いかに個々人が声を上げることが大切か、ということを考えていきます。

その後、田中優氏など、エネルギーに関する専門家をお招きして、勉強会を進めていきます。お気軽にご来場ください。

- ◎日時：第1回 10月19日(水) 18:00～20:00 / 第2回 11月12日(土) 13:30～15:30 / 第3回 調整中
- ◎会場：東北芸術工科大学 本館4階408講義室
- ◎パネリスト：竹内昌義 教授 / 馬場正尊 准教授 / 三浦秀一 准教授
- ◎ゲストパネリスト：第1回 マエキタミヤコ 客員教授 / 第2回 田中優氏 / 第3回 調整中
- ◎対象：一般市民、学生(聴講料、予約方法など未定)
- ◎主催：東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科 / 東北復興支援機構TRSO / NPO知音



※写真はイメージです

3.11以降、大きく変化した人々や暮らし、地域社会の価値観。新しい意識をもとに、芸工大も確かに動き出しています。



東北芸術工科大学3.11プロジェクト。  
3分11秒で残す学生たちの心のドキュメンタリー。

●「山形国際ドキュメンタリー映画祭」日時：10月9日18:00～19:45上映

10月6日から13日にかけて開催された山形国際ドキュメンタリー映画祭で、映像学科教授の根岸吉太郎学長のゼミに所属する映像学科3年の9名が東日本大震災をテーマにそれぞれ監督・制作した、3分11秒の短編劇映画が上映されました。これは根岸学長の提案によるもので、いまの時代に芸工大で映像と関わる学生のこれからを考えた時に、自分が経験した東日本大震災ときちんと向き合ってものづくりをする必要がある、という想いでスタートしています。制作の課程では、向き合うべき事の大きさに悩んだ学生もいましたが、お互いに想いを語り合い、整理し、熟考しながら作品に取り組んでいったそうです。「あの時、山形にいた学生は大きな被害にはあっていません。友人を失った学生はいましたが、太平洋側の現地で被災した人との間には距離

離があります。被災者の気持ちに対して、寄り添いたい時に寄り添い、時には距離もおける、ということが可能な位置。その認識を持ちながら、命とは、生き残ることは、を見つめている作品です。基本的にはドキュメンタリー作品ではありませんが、3.11から行き着く心のドキュメンタリーみたいなものです」と語る根岸学長。ゼミとしても、本格的な映画を撮るのは初めて。この作品が、映像作家を目指す学生たちの第一歩になることに期待を寄せていました。

根岸吉太郎 Kichitaro Negishi  
学長／映像学科教授。1950年8月24日生まれ、60歳。東京都出身。早稲田大学第一文学部演劇学科卒業後、74年日活に入社。78年「オリオン」の殺意より、情事の方程式」で監督デビュー。「ヴィヨンの妻～桜桃とタンポポ～」で2009年モントリオール世界映画祭の最優秀監督賞を受賞。



奥山清行氏がレクチャーする  
エネルギーシフトとモビリティデザインの新時代。

●「共創のテーブル」会期：7月29日、8月11日、12日 会場：やまがた藝術学舎

地域が抱える課題に対し、大学のデザイン力と企画力でサポートする「共創デザイン室」は、キックオフイベントとして「共創のテーブル」を開催しました。3回目のテーマは「エネルギーシフトとモビリティデザインの新時代」。ファシリテーターに、山形出身の世界的工業デザイナー奥山清行氏と共創デザイン室長の上原勲准教授を迎え、震災後の山形からデザインの可能性を探りました。今回のセミナーでキーワードとなったのは、エネルギーシフト、自然エネルギー、スマートグリッド、スマートシティ、モビリティデザインなど、世界が注目し地球規模で考えていく必要のある事柄です。国内外で様々なデザインチームとプロジェクトに携わってきた奥山氏は、これらを実現可能にする考え方と、街づくりとエネルギーの在り方につ

いてレクチャーしました。「チーム力が高いのが日本で、個人力が高いのはイタリアだと思われていますが、本当は逆。日本人は、人と議論して一致団結するより、特有の倫理観で自分の考えを伝えないことが多いですね。コツコツとものづくりをする個人力の方が高いんです」という奥山氏。その人間力を地域の力にし、スマートシティのような理想的な町づくりを実現するアイデアについて参加者たちがディスカッションし、活発な意見交換が行われました。

奥山清行 Kiyoyuki Okuyama  
1959年生まれ。山形県出身の工業デザイナー。世界的なカーデザイナーとして知られ、イタリアピンファリーナ社デザインディレクターを経て2006年9月に独立。現在、KEN OKUYAMA DESIGNのCEO。山形カレッジウェア研究会代表、グッドデザイン賞選考委員長、ニュートンデザイン代表。



**共創デザイン室**  
山形の製造・建設業、農業や観光などの地域振興を、東北芸術工科大学のデザイン力や企画力、そして学生の若い力でサポートする、産業界と大学の連携窓口です。これまでに手がけた成果物も一部、展示しています。マネジメントスキルを持った大学職員が常駐し、訪れた市民とともに、デザインによる産業界振興について語り合い、行動する地域デザインの実験室です。  
URL: <http://gs.tuad.ac.jp/kyoso/>



女川町に新たな被災者仮設住宅を建設。  
建築・環境、プロダクトデザイン学科を中心にボランティアも。

●「女川町プロジェクト」会期：8月24日～10月30日 会場：宮城県牡鹿郡女川町

津波で甚大な被害を受けた宮城県女川町。未だに避難所で暮らす住民も多く、仮設住宅の建設が急ピッチで進められています。建築家で京都造形芸術大学の教授である坂茂(ばん・しげる)氏は、仮設住宅189戸とコミュニティ施設の建設に着手。既存の平屋プレハブの仮設住宅は、女川では用地が足りないため2～3階建てとし、総合運動公園内に建設しています。また、十分な収納を確保して少しでも快適な生活が送れるように、室内には合理的な壁面収納がデザインされました。

建設作業の中で、壁収納に使われる棚の制作と設置のボランティア募集は坂教授の呼びかけにより、片上義則教授を中心に本学のデザイン工学部が全面的に協力。被災地の力になりたいという多くの人の手によって作業が進みます。岐阜県出身でプ

ロダクトデザイン学科3年の宮島康太さんは、震災時に山形で学生をしている意味を考えボランティア活動の参加を決めました。「棚の組み立てや塗装のほかに運搬などを迎えました。これまで3回、塩竈、多賀に繋がっているんだと思うとやる気が出てきます」と語る宮島さん。完成を待ちわびている避難所の方々に身近に感じながらの作業には熱が入り、多くの学生が得意分野で力を発揮していました。**WEB** ボランティアの学生の声を紹介しています。

片上義則 Yoshinori Katagami  
デザイン工学部長／プロダクトデザイン学科教授。1975年(株)東芝に入社し、空調・映像・家電機器デザインを担当。1984年～85年にイタリア留学。1999年CS推進センター企画担当、2003年東芝デザインセンター長を経て、2009年4月からデザイン工学部プロダクトデザイン学科教授。日本感性工学会会員。



**プロダクトデザイン学科**  
私たちの生活を取り巻くあらゆる製品や空間を創造するデザイナーを養成するプロダクトデザイン学科。文具・雑貨、家具、家電、自動車など、身の周りの「もの」の形や色には、それぞれに意味があります。使いやすい形、安全な形、楽しい形…。生活を支えるものをデザインすることは、未来の暮らしを形づくることにつながります。



海辺の街にはためく応援フラッグ  
アートで地域に笑顔を咲かせ、仙台でフィナーレ。

●「荒井良二とふらっくしゅぷ」会期：9月19日 会場：せんだい演劇工房10-BOX

山形出身の絵本作家、荒井良二氏が3.11以降の「日常」の気持ちを絵に描いて、4つの港町に応援フラッグを掲げた「荒井良二とふらっくしゅぷ」が、9月19日に仙台でフィナーレを迎えました。これまで3回、塩竈、多賀に繋がっているんだと思うとやる気が出てきます」と語る宮島さん。完成を待ちわびている避難所の方々に身近に感じながらの作業には熱が入り、多くの学生が得意分野で力を発揮していました。**WEB** ボランティアの学生の声を紹介しています。

音楽に呼応するように、舞台かかる帆となる白い布に絵具を走らせました。会場中央の大きな白い船に荒井氏が色彩を落としていくと、自然と子どもたちが集まります。山と空と太陽、野菜などが描かれた船に、肘まで使って絵具を広げる子、指先で少しずつ色を

叩いてみる子、多くの子どもたちが手のひらで絵具に触れていました。最後に船に掲げられた帆には大きく「ぼくらの」の文字。荒井氏は「「ぼくらの」のあとには何が入るのか考えてみてください。ぼくらの「スイカ」でもいいし「ミルク」でもいい。「ぼくらの」〇〇〇が大事で、それを毎日考えて頭の中を更新しながら進みたいと思うんです」と語り、この船が次の「日常」へ出発することを促すように、イベントは終了しました。

荒井良二 Ryoji Arai  
1956年生まれ。山形県出身。イラストレーター・絵本作家。小学館児童出版文化賞、ポロニャ国際児童図書展特別賞、講談社出版文化賞絵本賞、日本絵本賞ほか、2005年にはスウェーデンの児童少年文学賞「アストリッド・リンドグレン記念文学賞」などを受賞するなど海外でも高い評価を受けている。



**荒井良二とふらっくしゅぷ**  
東北復興支援機構主催の「荒井良二とふらっくしゅぷ」が公益社団法人企業メセナ協議会の「第4回GBFund」助成活動に採択されました。助成額は上限50万円。GBFundは、2011年3月23日に企業メセナ協議会が立ち上げたもので、被災者を応援する目的で行う芸術・文化活動や、被災地の文化資源を再生する活動として、今後5年間支援されます。今後の活動にもご期待ください。

芸工大 \* 夏まつり

山形の夏を彩る各地のお祭り。  
自らも楽しみながら、  
地域の盛り上げに関わる学生の姿。



「ひじおりの灯」を囲む  
『肘折黒』が今年もオープン。

肘折温泉に連なる旅館、土産屋の軒先に趣き深い八角形の灯ろうが揺れる「ひじおりの灯」は今年で5回目。絵画やデザインを専攻する学生たちがそれぞれの店の特色を描き、手漉きの月山和紙に表現した『肘折絵巻』は8月2日から31日の間展示され今年も湯治客の目を楽しませました。昨年参加して以来すっかり肘折温泉のファンになったという、芸工大卒業生で銅版画家の佐藤真衣さんは今年も参加。ウサギやインシたちがだんごを食べている楽園のような灯ろうを作り出しました。制作に関わった学生たちと地元青年団が湯治客と触れ合う屋台『肘折黒』は、昼はイベントの情報提供の場として、夜はカフェ&バーとして今年も大活躍。青年団の早坂隆一さんは「昨年来てくれたお客様が『黒』を楽しみにしてまた訪れてくれました。もう一ヶ月くらい延長して開店したかったですね」と、肘折温泉に根付いた新たな交流に喜びを感じていました。

WEB 「ひじおりの灯」の詳細を紹介しています。

誰でも気軽に「やっ初まか初」。  
花笠まつりを盛り上げました。

山形の夏を熱くする山形花笠まつりが今年も開催されました。芸工大では期間中、花笠パレードに参加したほかに、山形まなび館で参加型イベント「やっ初まか初」を企画。花笠の踊りをレクチャーし、誰でも気軽に「飛び入り参加コーナー」に入っていける場を作りました。踊りを教えるのは、涼しげな浴衣に身を包んだグラフィックデザイン学科の学生有志です。初めての人でもわかりやすいように、踊り姿の正面、背面を見せながら、「パツと花が開くように手を挙げて」「山から風が降りてくるように腕を下ろして」など、花笠踊りのイメージがわくようなフレーズで丁寧に指導していました。企画の代表を務める4年生の本間拓真さんは「七日町を元気にしようというプロジェクトからスタートした企画ですが、地域の人や会社、山形大学の学生と関わる機会にもなり、こちらが学ぶことが多かったです」と、祭りを通して豊かな経験を得たことを伝えました。

WEB 「やっ初まか初」の詳細を紹介しています。



木原先生が芸工大にいると  
思うと心強いし、  
会えば原点に戻れる気がします。  
いつまでも大学にいてくださいね！  
(OGの西村さん)

学校の美術室は、様々なものが生まれる卵のような空間。美術教師は、その血脈を新鮮にするために作品を作り続けたいいけないよ。(木原正徳教授)

写真左から：岡崎裕邦さん、西村淑恵さん、木原正徳教授、青山ひろゆき講師

OG \* 教授

芸工大が育んだ、  
信頼関係という大きな想いが  
奈良と東北をつなぎます。



心の通った支援のために、美術教師となった卒業生たちが活動しています。

奈良と東北の子どもたちが、それぞれが住む土地の風景や大事な家族の絵、メッセージを相互に寄せ合う「アートでつなぐ奈良・東北フェスティバル」というプロジェクトが始動しています。発起人は、美術科洋画コースの卒業生で高校美術の教職に就いている西村淑恵(旧姓:巽)さん。大学時代の恩師や後輩たちに声をかけ、東北の子どもたちが思う“すてきな東北”を絵画にして関西へ伝えていきます。一方で、西村さんが教えている奈良の子どもたちからは“すてきな奈良”や東北を想う心を伝え、地理的には遠く離れている関西と東北の心の距離感を縮めています。「震災のあと、東北の同期生たちに電話をしたら『大丈夫。東北のことを想ってくれて嬉しい。ありがとう』という声が返ってきました。その言葉がずっと心に残り、物資を送るだけの援助ではなく、気持ちで繋がるような支援をしなければ、と考えるようになりました」と、プロジェクトを始めたきっかけを語る西村さん。その想いに賛同した、西村さんの後輩であり芸工大美術科講師の青山ひろゆきさん、福島県川俣町の中学校で美術を教えている岡崎裕邦さんも力を合わせ、一度限りのイベントではなく継続的な心の交流にしたいために情報交換を重ねています。恩師である木原正徳教授は、「大学を離れた卒業生が東北のことを想い、専門分野を活かして駆けつけてくれたのが何より

嬉しいです。大学開学から20年が経ち、教え子たちが日本中の教育現場にいるということに改めて気づかされました。これからも、母校を基軸に多くの卒業生たちが信頼をもって繋がり、新しいことを始めていって欲しいですね」と、喜びと期待を語りました。今回、「アートでつなぐ奈良・東北フェスティバル」で描かれた絵画を芸工祭で展示することになり、会場に集まった木原教授と西村さん、青山さん、岡崎さん。厳しかったという木原教授の指導、講評会のあとの楽しみだったアトリエでの飲み会、懐かしい思い出話を花を咲かせながら当時を振り返ります。「先生、昔と違って目元のあたりとか随分と優しくなりましたね」と西村さんが話しかけると、木原教授は「当時は草創期で教員も少なかったし、僕が頑張ってたけども言わなきゃ、と肩に力が入っていたんだよ」と笑って答えました。「アートでつなぐ奈良・東北フェスティバル」を通して西村さんの被災地に対する想い、岡崎さんが話す福島の中学校の現状や青山さんのプロジェクトに対する考えに耳を傾け、「大学が蒔いた種が各地で成長して実をつけ、また新たな種を蒔いていくようです」と感慨深く語る木原教授。美術教師となり、ものづくりの楽しさや手応えを伝えていく立場になった卒業生たちの活躍をあたたく見守っています。



美術科 洋画コース

豊かな色彩と独特の絵肌で、見る者の心を揺さぶり、感動を与える油彩の世界。画面いっぱいに筆を走らせ、自分の想いを一つひとつの色として塗り重ねていく過程は、自分自身をしつくりと見つめ続ける行為でもあります。洋画コースでは、自らの手で試行錯誤を繰り返しながら、新しい表現の可能性を追求していきます。

今回の作品は12月2日(金)～4日(日)に開催される「奈良県立高岡高校 美術・デザイン科作品展」にて展示されます。会場は、奈良県文化会館と高岡高校の2会場。高岡高校美術・デザイン科に在籍する210名の生徒作品、絵画や版画、デザイン画、石影や塑像など約600点を展示します、また共同制作したアートフラッグも展示予定です。お近くの方は是非足を運んでください。

西村淑恵(旧姓:巽) Yoshie Nishimura  
奈良県出身。東北芸術工科大学美術科洋画コース3期生。学生時代は、教育・運動フェスティバル、柔道部、山登りサークルなどに意欲的に参加。小学生の時に出会った教師に憧れ教員を目指す。現在は奈良県立高岡高等学校美術科教員。

木原正徳 Masanori Kihara  
1958年生まれ。長野県出身。武蔵野美術大学卒業、二紀展(東京セントラル美術館鑑賞、田村賞、宮本賞、ほか)、青木繁記念大賞展(わだつみ賞)、別府現代絵画展、損保ジャパン美術財団選抜奨励展など。文化庁芸術家海外留学特別派遣(08イタリヤ)、二紀委員会。東北芸術工科大学美術科洋画コース教授。

WEB マークがついている部分は、<http://gs.tuad.ac.jp/gg/>にて詳細をご覧ください。



